

行孝公御十八歳御筆

詠歌大概

大泉

543
工
4



遺物

井門次弟左衛門

進上

詠歌大概

一冊

行孝公御十八歳御筆

以上

0 150 cm 10 20 30

SEKISUI JUSHI



543
工
4

543
工
4



詠奇大概

情之新者矣 宋人未評 詞以舊可用 詞不可去

遠之不用古句 凡新可勸捷能充達之委

可 古詩長遠也 追代之人可保去之

以詞雖一可謹可除弃之 七八年以來之人

心向勢 於古人吾共多以其同詞派

已為原例但取古句詠新類了五句中

及三夕老頗過分す除氣二方し上三四
字欠し行案し心同事詠古句詞成
之念始心花詠花以四季可詠立雜句
心意能可詠四季款如けし時取古句
之雅れ

星引れ山ほとまきけ みよー 行の音節出
久望の月のかつゝ ほとまきする五月
のまほこはあけり

あけし月令雅何處不悖し

年のうらに春深まり 月やあゝね春あけ
さくゝ 春の下の凡 ほのくとあゝのうら

さくゝ 雅方更なる詠え

常観念古款景氣可染心殊可見習
老る今行勢物流な櫻拾遺三十八人
集し内殊上平所可懸く磨貫え

忠峯 伊勢 雅亦和今是達時節敷氣
小所し敷

世間し感喪者知物由白氏文集亦一
才二性常可推然律通和和介之師
近只い高可為師傳心於古凡習詞
お之達者誰人子孫く代

秀徳新大略

随卷賦し更讀書連相
交在介狼藉之杜考れ

手定文の家乃分介よみ侍る

壬生忠峯

春立といふらんりま三青野山をみよと朝之也ん
仁和乃内いこまお一ト一書の内介りれ給き
れ内介 光孝二重

及つたあ春の野よせしあなつむ持、右手に雪は降つ、
喜みうらまへし讀人

梅うえに梅こころは雪のとね白梅はあは雪やある
梅乃花るれとこころは雪のとね白梅はあは雪やある
初出は月ころとこころは雪のとね白梅はあは雪やある
之くやとこころは雪のとね白梅はあは雪やある
かの花るある。——くはるにちじやと
そあはし。——侍をよとねこころは
あは。梅の花を折くよある。

他書之

人こころは雪のとね白梅はあは雪やある
梅乃花るれとこころは雪のとね白梅はあは雪やある
初出は月ころとこころは雪のとね白梅はあは雪やある

梅乃花るれとこころは雪のとね白梅はあは雪やある
初出は月ころとこころは雪のとね白梅はあは雪やある

俊頼朝也

山梅咲るれとこころは雪のとね白梅はあは雪やある
釋阿毛寺に侍し折る

屏風子を山子様うきくる下を

な鳥羽院

襦袢を山鳥の三つおみちり口そあねをか

花乃新とてよめめ

西行法師

平しなて花の重に毛まうのいよたぶらるる

花乃新よみ侍きよ

ら邊赤人

可美乃大宮人のいよあねや橋うり一乃子統

うまえかえりえにれもに花えし山鳥

ほとまにすくわりき時よあえ

素性法師

いさなり春のよ色にすくちん善なるあけの

色一守よみへ花のほろ

橋うり雨の降きね回しにぬれ花のほろ

小野山所

花のきこひのまきりなはは我あせもる派
移ぬたぬた片家十五首乃奇護侍^{きりか}不

後半朝卡

さくさく文節のホサの極りはれ雪あつとくみの
相あひ
さくさくは花のあつとくあつ

紀友則

くさくさのまきりなはは我あせもる派
可着乃奇とくあつとくあつ

坂京極坊

あけよりさく花因稀子た子誰か向ん春我御
むーし 持統天皇

春さく夏きにさく白ゆの右あすてつ天のくさ
に子内歌王乃給合侍きよよのゆゆ
子乃かきく侍きよ

俊親おト

又俊せははのさくみはけりゆの花さけつ玉の
軍

八重葎花のあめ麻あめきたに今ころんねは
初秋乃んをよめれ
年子きり

寂無法師

秋のきぬ年ハ半子さねと萩ののたさ
そし 西行法師

長いに草葉花露乃ちあらし秋のまぬ宮
これさるれ子こゝ家のうゝ合は
年子きり

子甲

月足れハ平に拍子止れまゝの秋は
な京極後
あはれ

左卯乃ちあはれ小秋候よりよ家のの月を
権中幼言傍思つゝの家は水と月と
いふんをよめ付きよ

後頼朝寺

あはれこむ野たの玉川萩まゝなるは
そし 宗隆卿

ふつふつとひびく月の光のあやみ

秋の介に ね鳥お洗

秋の清き夜よとみんおあやむと

せし 4 4

つやう鷹の居や落しんおあやむの光のよ

萩の光あやむの清き夜よとみんおあやむ

天竺山皇

秋の白きやうの光あやむと我太平の夜よ

朝康

白露子凡乃吹く秋の野うねきとあやむ

崇徳院よる首おやむとつらつらき時

讀く 清浦朝康

新田作らつとみ玉乃をよき靴子まきと

せし 4 4 西行法師

白雪を廻りけり行春おほむ向の方と

よきと

秋凡子休ろかれ侍る唐ぬれ物おのよ人の下を
榜右乃んを 式子内親王 よんえん

子度うは礎乃言に及てて物母子袖乃ちろ くさくさ

題——寸 大貳三位

えろなるそろこ一才の行也秋のね免のなり
師賢朝臣の梅津にくさくさく田家秋
風とらうとを徑信御

夕されハ門の務兼音信一巻此九下秋凡ん

む——寸 寐蓮に作

さひもさの糸どをるめりり寝立山の秋の 夕著
秋乃片とく免侍る

式子の親王

る社多しむしにそあぬ秋さよいつと派を舞の をさそ
と秋さよめこいれ家の今合の片

康秀

頃あしに秋の草木れおるむしを先 しん

七 十 人丸

うをきく此素より山の果廻る早回ハウ
チねをき

讀本

おくよはぬきちみふる床の聲けけり秋らる
寛手出時勝れき、菊を子次ハ可を
片くりてきこの花よりきれよくにた
るは、今の上りくまは、このはきく花、
判、これよりよめり

菅家

秋凡の上より、白菊の花、あ、ね、は、の
ち、きく、花をよめり

心あけよあ、ね、初雲のをきく、
菅の花

白露を時雨といふ、きく、下葉の、
み、ね、所

題 十 人丸

立田川をみちなる、ち、ね、は、の、
き、し、

よみく

秋ハ多ぬ紅葉ハやにありぬ道きかへし
二季乃后乃春宮花は具すと
市井風工の回川工紅葉ちるれつるれと
あけにるるをむきよあれ

幸平

千るす秋代をきり音川かしくちみ水
こり花しくえよよあん

列樹

山川風乃けりるこりえにあらぬれ
千五百番片合まのり

信月朝片

ほのくと左明の月み月歌は紅葉いあつは
そ乃片のまな島羽院
深緑あつるひよけりるんりちく時名のあつは
非夜

あ行に下

石上さぶのを降霜をく一夜さうりはのこ
兼曆二斗の衰乃奇合よふ足付き

経信

君代さあとうり子孫名をいさす所のま
平 寸 遍昨悦正

まおあ下の栗やせけのをさおさきうたあし
あうまのしかとれは時よ花くはまう
いふなれはうしうきを諒園はな

これいさうにきあし
いさのふはれあうしうおろし
又うとー路くのはあくなきあうさう
給つとあまよふこいきををばつとある
みる人たのたよまぬるさけのねよかんき
小式部ゆ侍るさうな上東門院より
丁ろ給なるきねをつらきうに小式
内侍とりきけしつるをさうよあ

諸君に下にいれしを、
恒徳公乃服ぬき侍りし

道信

恨不れ、子ぬき侍り有る、
祓そ月之うゝに、
益急、
下次、
いふ

なまの院

出、
西中の、
なまの、
題、
立別、
こち、
はら

五十肩より下りて一とせ

家隆卿

明へ又のきりねなるのや行月の事
此河院の時首を死すりて法にきりし
初の卒のんをよめ

俊頼卿

雅はほそじつそと玉うとありおれた人を
たふり侍る時不家より首のやん

侍るに五並れんを

坂京極侍

そりたよせぬる人の初時多不家下にも
人のやよつてきり

桑誠等

東地のやの丹格うまのこいわつをさる人の
移れたたかの時首を死すりて法にきりし
時五並れんをよめ

後成所

いたまふ家のハ海子ヤきまうなまのくちりてをては

正し 子こ よよ 子こ

又善の雲れくくく子物うと子天棟成なる
くをさう

伴啓

兼はうくくききるるのりてありてはを
難はうくくききるるのりてありてはを

権中助言後忠家は二十首のうりよ

又侍はれ時いのぬとてありはるをうりて

心をよめる 後頼

うりて人を和このよ下凡よとてありていぬぬ
そのを

心こ 子こ 宗佳流

れをるに岩はるは流川のわれしをまはる
とくは

下うのまて侍侍るはまらてりて

付をう回方乃ととありりる尋候て

う踏かるとな舞あつてるとい

りきれん



伴勝

不ぞいづくまはるる水の泡のうらまはる人よあはて
題 一 八 九

なきぬのこゝろの市とさへけおいさす人よ
よき人

片の心をなごか多しよあけけをいかに何を
後忠家より二十首をけりて讀まじ
子くわたとすしとくことをよめる

思草葉寸草子自方の道て
たす

忠峰

晨明のほろなくえり別よあ嘆はううき
あは

よき人

なとあ川ぬれに榎木あはれけ
あは

宗性には

今二葉と伊のさあは長月おを响の月を待
出待るか
このさへあは待るわおとよあわ

さしおくをさし侍るに下ぬかき大
付まゝり 元良親王

あはれなきにすむれおたきかいたるまきを
をのりて 大磨

足安子母の尾のさしあめなすし
はくもり 大磨

元正親王

徳ゆめかへおちし新はちる身をつくし
おえさうと

徳ゆめかへおちし侍る

徳正親王

わささ庭のさし款うさめし人を
はくもり 徳の夕雲

大母親王

袖にあそびぬるまゝのさしうさめし
はくもり 徳の夕雲

にやむしあそびぬるまゝのさしうさめし
はくもり 徳の夕雲

ふらふらと行きのやまのふらふらと

元情

研きをかみし袖を三ほりつきの和山はこ

月前迄と行つたを

和行は作

なきと月やぬねをねまひしるかこちろふなれ
わうはうち

義慈二年

孟春一日

箋



1845

1845

1845

1845

1845

1845

九州大學圖書印

